

海外に向けた明確な情報発信のあり方を考える

阿久津 一 恵

目 次

- I. はじめに
- II. 日本人の言語習慣
- III. 日本語の特性
- IV. 東電福島第一原発事故直後の会見に見る日本語の問題点
- V. 分かりやすい情報発信とは？
- VI. おわりに

I. はじめに

昨年3月11日に発生した東日本大震災は世界中に衝撃を与えたが、とりわけ東京電力福島第一原子力発電所の事故は、連日トップニュースとして海外メディアにも大きく取り上げられた。一連の報道で指摘されたのは、日本政府と東電の情報開示に関する問題点であった。3月18日付の International Herald Tribune 紙は、一面トップで日本の対応を次のように批判している¹⁾。

With all the euphemistic language on display from officials handling Japan's nuclear crisis, one commodity has been in short supply: information.

メディアにいらだちを与えたのは、政府と東電から出される情報量の少なさと情報開示のスピードであったが、加えて海外メディアはその情報を伝える日本語にもいら立ちを感じていたようだ。先の記事で日本語を「遠回しな言語」と呼んでいたが、同記事の後段ではさらに“ambiguous language”（あいまいな言語)²⁾とも表現している。インターネットの普及で情報が瞬時に世界中を駆け巡るようになった今日、正しい情報の開示とともに、分かりやすい情報の発信の仕方にも注意を向けるべき時期である。本稿では、海外からは「遠回し」で「あいまい」だと見られている日本語の特質を考える。そして、福島第一原発事故発生直後の官房長官会見を例にとり、「遠回し」で「あいまい」と受け取られた原因を考え、どうすれば分かりやすい情報を発信できるかを考える。また、アメリカで2001年9月11日に発生した同時多発テロ直後の米国政府の会見を例に、英語による情報発信の仕方で参考にすべき点を考える。

II. 日本人の言語習慣

木下 (1996) によれば、日本人の言語習慣の特性には次のような点があるという³⁾。

- (A) 日本的対応はもっぱら相手の立場を立てようとする配慮に重点がある。
- (B) 婉曲で間接的な表現に流れやすい。明快・直截な表現を好む欧米人の目から見ると、日本人は直接の回答を避けてとらえどころのないことを言う。
- (C) 敬語 (尊敬語・謙譲語・丁寧語) を多用する。ていねいだが冗長である。
- (D) 理由を述べてから発言の主題に入る。
- (E) かなり長い挨拶や前置きがあって、はじめて本論に入る。
- (F) 親切過剰である。
- (G) すみずみまで明確にものをいうことを好まない。
- (H) ディベートが成り立たない。

木下によれば、こうした日本人の言語習慣は地理的環境に由来するという⁴⁾。明治以前は同族社会だった日本では、みんなに同調することが生活の知恵であった。こうして、自分の考えよりもまず相手の立場を立てよう、相手の感情を傷つけないように当たりをやわらかくしようとする言語習慣が生まれた (A, B, C, E) という。これらは理屈よりも相手の感情に重きを置く応対法であり、この種の応接を目にし、耳にしながら育った子どもたちが、やがてすみずみまで明確にものを言うことを好まず (G)、また討論を苦手とする (H) おとなに育っていくのは当然だという。相手の〈気分〉を重視して敬語や緩衝表現を頻用する社会に、とかく親切を押しつけたがる人々が現れるのも (F) さほどふしぎではないという。なお、(D) は由来が異質で、これは日本語のシンタックスからくるためだという。

しかし、こうした日本人の言語習慣は変革を迫られているという⁵⁾。第一には、情報量の激増に伴い、情報の効率化が要求されているためである。事務処理の効率を上げるためには、敬語表現を整理し、あいさつ・前置きを切り詰め、遠回しで間接的な表現を避けて、直截・簡明にものを言う。そしてできるだけ早く結論を述べ、理由を補充する。第二には、国際化の圧力で、国際的に発言せざるを得ない現実があるためであるという。交渉で相手を論理的に屈服させるためには、明確にものを言う訓練と討論の修練を積むことであるという。こうした状況下で、木下は、「現代日本人はもっと簡潔に (余分な敬語や前置きは省いて)、また婉曲よりも明快・直截を旨として、できるだけ明確にものを言うべきだ⁶⁾」と提言している。

木下の提言からすでに15年余りが経過したが、今日に至るまで、日本人の発信する情報はいまだに「遠回し」で「あいまい」だとの批判を受けている。では、日本語にはどのような特性があるのだろうか。

Ⅲ. 日本語の特性

1. 主語の省略

池上（2007）によれば、西欧の言語であっても主語を省略するということは起こるといふ。英語でも砕けた会話で ‘Don’t know.’（「知ラナイヨ」）や ‘Can’t remember.’（「思イ出セナイワ」）ですますことがあるといふ。しかし、文法や文体に制約されて、日本語ほど柔軟で自由には行われないう⁷⁾。われわれは、主語をあまり意識せず日常的に話したり書いたりしている。必要があれば、前後の文脈や背景から主語を類推することができる。しかし、主語が明示された文体に慣れている欧米人にとって、日本語における主語の省略はなかなか理解しがたいポイントである。

では、欧米人にとって主語とはどのようなものであろうか。荒木（1985）によれば、英語などのインド・ヨーロッパ語は厳しい自他の区別の確認の上に成立しているといふ。一方、日本語は常に自他の区別を止揚せんとするダイナミックスの作動している日本文化の上に作り上げられた言語だといふ⁸⁾。つまり、インド・ヨーロッパ語における主語の果たす役割は、日本語のそれとは比較にならないほど大きいことになる。荒木は「可能」を表現する場合の日本語と英語を例にとり、この違いを説明している⁹⁾。英語の “I can swim.”（私は泳ぐことができる）では、「泳ぐことができる」といふことはあくまでも I の主体性、能力、あるいは時には責任の問題なのであつて、それ以外の何物でもないといふ。これに対して、日本語の「明日は多分来られると思います。もし来れないときはお電話いたしましょう。」といふ文では、「可能」が「られる」によつて表現されている。日本人にとって何が可能かは、みずからの主体性においてそれを可能にするのではなく、「可能」が他律的に没主体的に与えられるものだからだといふ。

こうした違いを見てくると、主語の主体性にあまりこだわらず、主語の省略に慣れているわれわれが世界に向けて情報を発信する場合には、インド・ヨーロッパ語と日本語の違いを念頭に置く必要がある。

次に挙げるのは、東日本大震災直後の読売新聞の社説の一部である。第一例は、「東日本巨大地震 原発事故の対応を誤るな」と題された3月13日付の社説のまとめの部分である¹⁰⁾。

原発事故を防ぐ体制を強化すべきだ。対応を誤れば、国内外の原発活用が危うくなる。

これを同社の英字新聞 The Daily Yomiuri に翌日掲載された英文の社説¹¹⁾と比較してみよう。

The government must reinforce its system for preventing accidents at nuclear power plants. If the government makes mistakes in handling such accidents, the utilization of nuclear power stations at home and abroad will be jeopardized.

当然のことながら、日本文では抜けている主語「政府」が補われ、「対応すべき」対象「こうした（原発）事故」も明らかになっている。

第二例は、「計画停電 説明不足が招いた首都大混乱」と題した3月15日付の同紙の社説の冒頭部分である¹²⁾。

電力不足の非常事態とはいえ、国民への説明を軽視した姿勢は強く批判されて当然だ。東京電力が管内の1都8県（関東全域に静岡県の一部と山梨県）を対象に、14日から実施した「計画停電」のことである。

翌日のThe Daily Yomiuriの社説は次のように始まっている¹³⁾。

Even allowing for the crisis caused by a power supply shortage, Tokyo Power Co. deserves strong blame for fumbling its explanations to the public.

We refer to the planned power outages that TEPCO originally announced would start Monday morning in areas it serves, including Tokyo and six prefectures in the Kanto region plus Yamanashi Prefecture and parts of Shizuoka Prefecture.

日本文では抜け落ちている「強く批判されて当然」という批判の対象となる東京電力が補われ、そう主張する執筆者も“*We*”という主語で補われている。

2. 〈スルの〉な言語と〈ナル的〉な言語

安藤（1986）によると、日本人には「スル」の論理より「ナル」の論理をよしとする価値観があるという¹⁴⁾。〈スルの〉な言語は、行為者を際立たせて表現しようとする言語であるという。一方〈ナル的〉な言語は行為者を表面に出さず、あたかも〈自然の成行きでそうなった〉というふうに表示する言語だという。典型例として、安藤は「結婚することになりました」や「転居することになりました」を挙げている。日本語が〈ナル的〉言語となった背景には、ことを〈スル〉よりも、自ら〈ナル〉をもって価値とする考え方があるという。これは、自己犠牲を強いられ、自己滅却による〈和〉を最高の美德とする〈家的〉な共同体のあり方から、必然的に生じてきたものであるという。これに対して、西欧の言語を〈スルの〉な言語足らしめている要因の一つが、〈個〉の考え方だという。

池上（1981）も、英語が〈動作主〉指向的な傾向にある〈スルの〉言語であるのに対して、日本語は〈出来事全体〉把握的な傾向にある〈ナル的〉言語だという¹⁵⁾。

3. 〈もの〉と〈こと〉

池上（1981）によれば、〈もの〉は〈個体〉中心的な見方から生み出されるものであり、一方〈こと〉は〈全体的状況〉中心的な見方から生み出されるものだという。そして、日本語は〈こと〉的なとらえ方が優位に立っているという。それに対して、英語は〈もの〉的なとらえ方への指向性が強いという。〈こと〉的な言い方に対する日本語の好みの例として、池上は「アナタ、太郎サンノコト好きナノネ」という表現を挙げている。ここでは〈太郎さん〉という〈もの〉を包んで、〈こと〉を使うことによって、当たりを柔らかくしている印象を受けるという¹⁶⁾。ところが英語はむしろ〈もの〉を〈こと〉から取り出して露呈するとして、次の英文と二つの日本語訳を挙げている¹⁷⁾。

- a. Do you know of the millions in Asia that are suffering from protein deficiency because they get nothing but vegetables to eat ?
- b. 手ニ入イル食物ト言エバ、野菜バカリノタメ、蛋白質不足デ苦シンデイルアジアノ何千万人ノ人タチヲ知ッテイマスカ
- c. アジアノ何千万人トイウ人タチガ手ニ入イル食物ト言エバ野菜バカリノタメ、蛋白質不足デ苦シンデイルコトヲ知ッテイマスカ

bは英語の構文を直訳的に再現した〈もの〉的な言い方で、出来事の中から〈知る〉の対象として〈アジアの何千万人〉という〈もの〉を取り出して、それに残りの部分を修飾的な叙述として結びつけた言い方だという。一方、cは出来事そのままを一つのまとまりとして、一つの節の形であらわした〈こと〉的な表現だという。池上は日本語としてcの方が自然であるのは言うまでもないと述べている。

4. ぼかし表現

安藤によれば、日本人は明確な表現を避け、輪郭をぼかして表現する傾向があるという¹⁸⁾。「肉を500グラムほどください（少々誤差があっても構わない）」「お茶でも飲みませんか（コーヒーでも結構）」「電話でなり知らせてください（手紙でも可）」などの表現は、非論理的であるというよりは、相手への思いやりを込めた文と考える方が妥当だという。こうした表現は、木下の指摘する理屈よりも相手の感情に重きを置く日本人の応接法にかなったものである。池上も〈こと〉的なとらえ方をする日本人の、輪郭をぼかした言い方への好みを指摘している¹⁹⁾。日本人は、「ソコ」と言わずに「ソノヘン」と言ったり、「ボツボツ」や「チョット」などを好んで付け加える傾向にあるという。

5. 後方重心型の言語

木下が日本人の言語習慣の特性の一つとして指摘していたものに、理由を述べてから本題に入るという特性があった。木下はこの特性は、日本語のシンタックスからくるため他の特性とは由来が異質であると述べているが、この特性こそ日本語を分かりにくくしている大きな要因である。外山(1992)によれば、日本語はあまり重要でない周辺部分から話を始め、終わりにいくにしたがって大切なことが出てくる後方重心型(△)言語であるという。一方、英語は大体の方向づけをはじめではっきりさせる前方重点型(▽)の言語だという²⁰⁾。日本人の発言は、何を言いたいのかよく分からないという海外からの批判をよく耳にするが、発言の最初の部分を聞けば大体のポイントが分かる構文に慣れた欧米人にとって、この批判は無理からぬものである。

Ⅳ. 東電福島第一原発事故直後の会見に見る日本語の問題点

これまで、情報を発信するうえでの日本語の特性に起因するさまざまな問題点を見てきた。次に昨年の東日本大震災による東京電力福島第一発電所一号機での水素爆発事故後の官房長官による記者会見を例にとり、具体的な問題点を見ることにする。少し長くなるが、以下は水素爆発があった2時間半余り後の昨年3月12日午後6時前の枝野官房長官の会見全文である²¹⁾。(各センテンス前の番号は筆者が記入)

(1) すでに報道もされております通り、福島第一原子力発電所において、原子炉そのものであるということは、今のところ確認されておきませんが、何らかの爆発的現象があったということが報告されております。

(2) 現在、先程の党首会談以降、総理そして経産大臣を含めて、専門家をまじえて、状況の把握と分析、対応に全力で当たっているところでございます。(3) 放射能について測定はきちっと行われておきまして、このあと6時過ぎにも直近の新しい数字が出てまいります。

(4) 現在のところ出てきております数字のもとでは、当初からこの間、冷却水の水を増やす、あるいは圧を弱めるために放射性物質の含まれているものであるけれども管理されたもとで一部放出をするというような想定の下で、想定される数値の範囲であるというふうに考えております。(5) しっかりとこの放射性物質の数値の把握に努めて、周辺住民の皆さんの安全については万全を期しているところでございます。(6) 万全を期するという観点から、今回の事象は、東京電力福島第一原発の事象でございますが、第二原発についても念のため、従来3キロ圏内からの退避を指示をいたしておりましたが、10キロ圏内からの退避の指示に改めたところでございます。(7) いま総理、経産大臣そして原子力の保安院そして原子力安全委員会、専門家を交えて、しっかりと情報の把握、分析、そして対応に努めているところでございます。(8) 現時点でしっかりと放射性物質の測定が行われておきまして、この状況をしっかりと把握をしながら、周辺住民の皆さんの安全について万全を期しているところ

でございます。

(9) また、万一の場合に備えたヨードの準備をしっかりといたしているところでございますので、大変、特に周辺の皆さんにとっては不安は多いかと思いますが、いま政府、東京電力、そして保安院、原子力安全委員会、総力を挙げて万全の対応に努めておりますので、落ち着いて対応をしていただきますようお願いを申し上げます。(10) このあとしっかりと状況情勢の把握に基づいた分析と対応が示しできる段階のもとに、大変ご関心、皆さんの関心も当然高い事象でございますので、適切に情報をお伝えをしまいたいというふうに思っているところでございます。(11) なお、この福島第一原発の件に加えまして、あらためて私から何点かこの場を借りてお願いをさせていただきたいと思っております。(12) まもなく夜になりますが、繰り返し申し上げておきますが、まだ余震あるいは津波の可能性は残っているということをぜひしっかりと意識をしていただきまして、避難所等に避難をしておられる皆さん、家の様子を見てくるなどのことを、これから夜間になりますので、くれぐれも避けて頂きまして、避難所など安全な場所にしっかりと（避難して）²²⁾ 頂きますようあらためてお願いを申し上げます。(13) また二次災害のおそれ、交通等の混雑による救難活動の遅れの可能性もございますので、まだ二次災害の可能性のある時点では、家族の方あるいはボランティアで協力をしたいという思いの方、少なからずいらっしゃるかと思いますが、被災地へ入ってくることについてはくれぐれも慎重にご判断を頂きたいというふうに思っております。(14) 特に、津波の心配残っておりますので、海岸部あるいは河川の河口付近には近づかないようお願いを申し上げます。

(15) またこれはすべての国民の皆さんにお願いをいたしたいと思っておりますが、この地震と津波による原子力発電所あるいは火力発電所等の運転停止によりまして、いま発電の総量が大きく落ち込んでいるところでございます。(16) 現在停電の地域の中にはまさに地震、津波の直接の影響で停電になっている地域もございますが、全体の発電量とのかねあいでも停電になっている地域もございます。(17) ぜひ、この地震・津波に国民を挙げてしっかりと克服をしていくという観点から、すべての国民の皆さんに節電をお願いを申し上げます。(18) ぜひ不要な電力については当分の間、使わないで節電につとめていただきまして、いま直接の地震の被害による停電以外の地域の皆さんが必要最小限の電力しっかりと確保できるようご協力をお願い申し上げる次第でございます。

(19) なおさらに、この間、特に、チェーンメールを通じて、事実とまったく異なっている情報をあたかも警察によるとなどのあたかも事実であるかのごとく装った形でのメール、チェーンメールが多数出回っていることを把握をいたしております。(20) こうしたことはいたずらに不安感をあおるのみならず、それに対する対応で救出救難活動が遅れて、人命にかかわるということもあります。(21) ぜひこうしたことは避けて頂きますよう、お願いを申し上げます。(22) 報道機関の皆さんが、各機関からの発表そして報道機関としてのしっ

かりとした取材に基づいて情報を的確に流していただいているというふうに思っておりますので、根拠のないそうした情報に惑わされることのないよう、またそれを広げる側に回ってしまうことのないようご協力をお願いを申し上げます。

(23) なお、マスコミの皆さんにも2点お願いを申し上げます。(24) 適切な取材で国民の皆さんに的確な情報をお伝えするという役割は大変重要でございまして、そのことについてはそれぞれの判断と責任のもとに進めてもらいたいと思っておりますが、やはりこれ、上空からの取材がどうしても主になるということの中で、ヘリコプターの音が大変いろいろな妨げになるという声が多く届いているところでございます。(25) ぜひこの点についてのご配慮をお願い申し上げますとともに、また取材とはいえ、津波等の危険のある地域に立ち入った取材、報道などもいくつか見られておりますので、ぜひこの点については控えて頂ければありがたいと思っております。(26) また、同時に上空からの映像などで、危険な地域に立ち入っていらっしゃる被災者の映像などが流れております。(27) こうした被災者の皆さん、心情はよく分かりますけれども避けていただきたいとお願いを申し上げているところでございますが、こうした映像を流す場合には、こうしたことは危険なんだということで二次災害のおそれ、リスクというものが小さくなるかというふうに思っておりますので、ぜひこうしたご配慮もお願いできれば幸いです。

(28) 最後に繰り返してもう一度最初の点について申し上げます。(29) 福島第一原発で生じた爆発的事象につきましては、現在、事実の正確、詳細な把握、分析、それに対する対応を菅総理、そして海江田経産相、原子力の保安院、原子力安全委員会、当事者の東京電力、総力を挙げて全力で取り組んで住民の皆さんへの被害が生じないよう全力を尽くしているところでございます。(30) これまでにしっかりと放射性のレベルについては測定をし、それに基づいて皆さんへの指示を行ってきているところでございます。(31) このあとまた6時過ぎに新たな情報も入ってまいりますので、こうした放射線測定の数字に基づいて必要な退避などをお願いしてきておりますので、ぜひ落ち着いてそれぞれ関係の皆さん、避難所などにおられる方多いと思いますが、自治体、警察、消防、自衛隊総力あげて対応していただいておりますので、こうしたところの指示に従って落ち着いて対応を頂きますよう重ねてお願いを申し上げます。(32) 私からは以上でございます。

以上が記者会見の全文であるが、一つ一つの文章が長く、分かりにくいという印象を受ける。その原因の一つが、(1)の「原子炉そのものであるということは、今のところ確認されておられません」や(9)「特に周辺の皆さんにとっては不安は多いかと思いますが」という文章の挿入である。これら譲歩を表す一文は、人々の不安を軽減しようと挿入されたものだと思われるが、かえって文章全体を長く、分かりにくいものになっている。

次に、敬語の問題である。木下が日本人の言語習慣の一つとして指摘しているほど敬語を多用

しているわけではないが、敬語、特に丁寧語が頻繁に用いられているため、長々しい文章になっている。「ございます」を「です」に、「おります」を「います」に、そして「お願いを申し上げます」を「お願いします」に置き換えただけで、かなりすっきりした印象に変わるはずである。

最後のそして最も大きな原因が、日本語の特性として先に挙げた点にある。具体例を示しながら、問題点を見ていくことにする。

〔例1〕本文(4)「現在のところ出てきております数字のもとでは、当初からこの間、冷却水の水を増やす、あるいは圧を弱めるために放射性物質の含まれているものであるけれども管理されたもとで一部放出をするというような想定の下で、想定される数値の範囲であるというふうに考えております。」

この文章は、後方重点型の文章で主語も省略されている。そして、「出てきております数字」の部分だが、直前の文章の「数字が出てまいります」と同様、〈スル的〉な言語と〈ナル的〉な言語で指摘されたあたかも〈自然にそうなった〉という表現が用いられ、数字がどこからともなく出てきたという印象を与えている。そして、「というような」や「というふうに」というほかし表現も使われていて、簡潔さを欠く文章となっている。さらに、譲歩と条件を表す文章が挿入されているため、複雑な一文となっている。この部分で官房長官が一番言いたかったことは、「我々（政府）は、現在の数字は想定された数値の範囲であると考えている」ということだったはずだ。

〔例2〕本文(13)「また二次災害のおそれ、交通等の混雑による救難活動の遅れの可能性もございますので、まだ二次災害の可能性のある時点では、家族の方あるいはボランティアで協力をしたいという思いの方、少なからずいらっしゃるかと思いますが、被災地へ入ってくることについてはくれぐれも慎重にご判断を頂きたいというふうに思っております。」

この文章も、後方重点型の文章のため、分かりにくい一文となっている。官房長官が最も言いたかったのは、「家族の方あるいはボランティアで協力をしたいと思う方は、被災地へ入るのは慎重にご判断ください」ということで、その理由は「二次災害の恐れがあり、交通等の混雑による救難活動の遅れの可能性があるため」である。ここでも先の例と同様に、「というふうに」というほかし表現が用いられている。また、「入ってくること」と〈もの〉より〈こと〉的なとらえ方をした表現が用いられている。

〔例3〕本文(15)–(18)「(15) またこれはすべての国民の皆さんにお願いをいたしたいと思いますが、この地震と津波による原子力発電所あるいは火力発電所等の運転停止によりまして、いま発電の総量が大きく落ち込んでいるところでございます。(16) 現在停電の地域の中にはまさに地震、津波の直接の影響で停電になっている地域もございますが、全体の発電量とのかねあいで停電になっている地域もございます。(17) ぜひ、この地震・津波に国民を挙げてしっかりと克服をしていくという観点から、すべての国民の皆さんに節電をお願いを申し上げます。(18) ぜひ不要な電力については当分の間、使わないで節電につとめていただきまして、いま直接の地震

の被害による停電以外の地域の皆さんが必要最小限の電力しっかりと確保できるようご協力をお願い申しあげる次第でございます。」

この4つのセンテンスからなるパラグラフで一番重要なのは、(17)の部分である。(15)(16)は、その理由となっていて、(18)は(17)の部分再度強調するセンテンスである。このパラグラフも、典型的な後方重点型であり、理由が先行して結論が後になっているため、分かりにくいものとなっている。

[例4] 本文(23)-(25)「(23) なお、マスコミの皆さんにも2点お願いを申し上げます。(24) 適切な取材で国民の皆さんに的確な情報をお伝えするという役割は大変重要でございまして、そのことについてはそれぞれの判断と責任のもとに進めてもらいたいと思っておりますが、やはりこれ、上空からの取材がどうしても主になるということの中で、ヘリコプターの音が大変いろいろな妨げになるという声がたくさん届いているところでございます。(25) ぜひこの点についてのご配慮をお願い申し上げますとともに、また取材とはいえ、津波等の危険のある地域に立ち入っての取材、報道などもいくつか見られておりますので、ぜひこの点については控えて頂ければありがたいと思っております。」

マスコミに対して2点お願いをしたいと冒頭で言いながら、お願いの2点「ヘリコプターの音がいろいろな妨げになっているので配慮してほしい」と「津波等の危険がある地域に立ち入っての取材・報道は控えていただきたい」は、なかなか出てこない。マスコミに対する要請を伝える前に、マスコミへの配慮が長々と述べられているため、分かりにくいパラグラフになっている。

以上の例で見てきたように、枝野長官の会見は、的確で分かりやすい情報発信からは程遠い内容となっていた。炉心溶融や放射性物質の大量放出の危険性が危惧され、世界中が注視する中で日本政府の発表としては、情報の内容そのものもさることながら、情報発信の仕方にも多くの課題を残した。

V. 分かりやすい情報発信とは？

では、分かりやすい情報発信とはどういうものであろうか。2001年9月11日に起きた米国同時多発テロのニュースは、ニューヨークの世界貿易センタービルに衝突する二機の航空機の衝撃的映像とともに、世界中に配信された。次は、事件当日午後に行われた大統領顧問による記者会見の全文である²³⁾。

I'm Karen Hughes, counselor to President Bush, and I'm here to update you all on the activities of the federal government in response to this morning's attacks on our country.

As you heard from President Bush a short time ago, the federal government is acting to help local communities with search and rescue and emergency management operations, to take

all appropriate precautions to protect our citizens, and to identify those responsible for these despicable attacks on the American people.

While some federal buildings have been evacuated for security reasons and to protect our workers, your federal government continues to function effectively. We have a federal emergency response plan, and at President Bush's direction we are implementing it. We began to implement it immediately after the first attack in New York this morning.

We contacted American forces and embassies throughout the world and placed them on high alert. The United States Secret Service immediately secured the president, the vice president and the speaker of the House, and they are all safe. They have also secured members of the national security team, and president's Cabinet and senior staff.

As you know, President Bush was in Sarasota, Florida, when the first attack occurred this morning. Air Force One has now landed at Offutt Air Base in Omaha, Nebraska, and the president is in a secure location. He is in continuous communication with the vice president and key members of his Cabinet and national security team.

Vice President Cheney and our national security adviser, Condoleezza Rice, are in a secure facility at the White House. I have just come from there. The secretary of transportation and other members of our White House senior staff are gathered at a command center there, and we are coordinating with other branches of our federal government.

The secretary of defense remains at the Pentagon and the secretary of state is en route back to Washington from his trip to South America.

President Bush is conducting a meeting of the National Security Council as we speak. They are meeting President Bush from his location and other members from different locations in Washington and other locations.

As many of you have been reporting, the Federal Aviation Administration ordered all airports closed, and all planes which were in the air were directed to land at the nearest airport. International flights were diverted to alternate locations outside the United States. Transportation Secretary Mineta has directed the Federal Aviation Administration to suspend operations

until at least noon tomorrow. So no airline flights will operate until at least then and until the FAA announces that operations will be resumed. Secretary Mineta has also issued orders controlling the movement of all vessels in United States navigable waters.

The Federal Emergency Management Agency has activated eight urban search and rescue task forces in New York, and four of these highly trained teams are at work here in Washington at the Pentagon. Every federal agency has implemented continuity of operation's plans to make sure the government continues to function effectively.

While the markets closed today because of the situation in Manhattan, the United States financial system has continued to operate.

Banks have been open all day. The Federal Reserve has operated regularly and continuously. The Department of Health and Human Services has mobilized medical personnel and supplies to provide help to local authorities who are working so diligently to respond and try to help the victims of these despicable attacks.

The Department of Justice is setting up a hotline for families who fear that their relatives may have been victims of one of these attacks, and we will be announcing that telephone number shortly.

Our fellow citizens and our freedom came under attack today, and no one should doubt America's resolve. President Bush and all our country's leaders thank the many Americans who are helping with rescue and relief efforts. We ask our fellow Americans for your prayers, for the victims, for their families, for the rescue workers and for our country.

Thank you all very much, and we will continue to update you as information is available and confirmed.

先に挙げた枝野長官の会見と比べてまず目に付くのが、全体が非常に簡潔なセンテンスで構成されている点である。34からなるセンテンスのうち、単文が13、重文が9、複文が10、そして混文が2となっている。重文9つもすべて単文を and で結んだもので、13の単文と合わせた31の単文の文型を見ると、第I文型(S+V)が6、第II文型(S+V+C)が10、第III文型(S+V+O)が14そして第IV文型(S+V+O+C)が1となっていて、第II文型と第III文型というシン

ブルな文型が中心となっている。混文も、単文と複文の組み合わせで、複文のうち一つは関係詞を用いたもの、他方は副詞節を用いた構文で、ともにあまり複雑な文章にはなっていない。

枝野長官の会見では、安全面を強調するために、譲歩や理由を表す長めの文章が挿入されていた。一方、この会見で大統領顧問は、形容詞の“safe”や“secure”という短い言葉を用いて大統領や政府要人の無事を伝えている。また、復旧活動にあたる人々を“highly trained teams”と呼び、彼らの活動の様子を、“effectively”や“diligently”という副詞で表現して、人々に安心感を与えようとしている。さらに、テロという非常事態に対する米国政府の取り組みを説明している。まず、“He is in continuous communication with the vice president and...”と大統領が先頭を立て事態に対処している様子を述べている。さらに、“Every federal agency has implemented continuity of operation’s plans to make the government continues to function effectively.”と政府各機関が平静を保ち、それを継続していく姿勢を強調している。また、“the United States financial system has continued to operate.”や“The Federal Reserve has operated regularly and continuously.”と、アメリカの金融システムがテロ攻撃で揺らぐことなく機能していることを強調している。この大統領顧問の会見は、簡潔で分かりやすく、また短い言葉を有効に使って人々の動揺を抑えようとしていることが見て取れる。

VI. おわりに

以上、日米の非常事態における政府の会見を見てきた。両者は、地震・津波による原子力発電所の放射能漏れの危機とテロ攻撃という全く異なる状況で行われたものだが、世界に与えた衝撃という点で二つの事件は近年類を見ない出来事であった。世界的関心が集まる中で発信される情報は、まず内容の正確さとスピードが求められる。同時に、その情報は受け手に誤解を与えず、分かりやすいものでなくてはならない。その点で、日本発の情報は再考すべきときである。15年前に木下が提唱したように、われわれは簡潔で明快な文章を使い、できるだけ早く結論を述べて、理由を補充すべきである。そして、省略してもわれわれなら推察できる場合でも、大事な部分では主語を明示する必要がある。日本発の情報は、日本だけに留まらず常に世界に発信される時代だということを、われわれは再認識すべきである。本年に入り、我が国は領土問題をはじめとするさまざまな外交問題に直面している。自国の主張を世界に向けてアピールするためにも、これまで以上に分かりやすい情報発信を続けなくてはならない。「遠回し」で「あいまい」な言葉を脱して、日本政府から「簡潔」で「明快」なメッセージが出される日が一日も早く来ることを願っている。

注

- 1) 2001年3月18日付 International Herald Tribune。
- 2) 同上紙。
- 3) 木下是雄『日本人の言語習慣を考える』, 晶文社, 1996年, 49-52頁。
- 4) 同上書, 52-54頁。
- 5) 同上書, 56-62頁。
- 6) 同上書, 66頁。
- 7) 池上嘉彦『日本語と日本語論』(ちくま学芸文庫), 筑摩書房, 2007年, 264-265頁。
- 8) 荒木博之「やまとことばの人類学 日本語から日本人を考える」, 朝日新聞社, 1985年, 16頁。
- 9) 同上書, 22頁。
- 10) 2001年3月13日付読売新聞朝刊。
- 11) 2001年3月14日付 The Daily Yomiuri。
- 12) 2001年3月15日付読売新聞朝刊。
- 13) 2001年3月16日付 The Daily Yomiuri。
- 14) 安藤貞雄『英語の論理・日本語の論理』, 大修館書店, 1986年, 257頁。
- 15) 池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』, 大修館書店, 1981年, 281頁。
- 16) 同上書, 257-258頁。
- 17) 同上書, 258-259頁。
- 18) 安藤, 前掲書(注14), 286頁。
- 19) 池上, 前掲書(注15), 258頁。
- 20) 外山滋比古『英語の発想・日本語の発想』, 日本放送出版会, 1992年, 11頁。
- 21) www.asahi.com/special/10005/TKY201103120504.html
- 22) カッコ内筆者加筆。
- 23) www.washingtonpost.com/wp-srv/onpolitics/transcripts/hughestext091101.htm